

「イエス！次郎（校長室より）」（第3号） 「悔しさをばねに」

時は平成6年5月21日。ここは長崎県立総合運動公園陸上競技場（現在のトランスコスモススタジアム長崎）。雲一つない青空の下、長崎県陸上選手権大会が開催されている。

「さあ、男子やり投げ。いよいよ最後の投擲者は、渡崎君。」アナウンスの声が競技場に響き渡り、緊張した私は助走路に立った。ありったけの力を右手に込めてやりを握りしめ、目はまっすぐ前を見つめていた。「私は何をしているのだろうか？」頭の中は真っ白だった。確かに高校時代は陸上選手だったが、専門種目は短距離とハードルだったはず。

「次郎先生、ガンバレー！」生徒の声で我に返った。生徒の横には嫁さんもいた。「そうだ、思い出した。嫁さんのためにも頑張らなければ。」審判員の白旗が振られ、私は右足から助走を始めた。

平成6年5月4日、私は嫁さんと結婚した。結婚祝いにと、陸上部の顧問の先生から、やり投げ専用のスパイクをいただいた。顧問の先生は陸上競技が専門の体育の先生で、4月に転勤して来られたばかりだった。私は副顧問をしていたが、生徒と一緒にその先生の指導を受けていた。生徒が練習しているやりを投げ返していると、「次郎先生、肩強いね。やり投げ向いてるかもよ。」

「そうですか。投げたことないんですけどね。えへへ。」ほめられていい気になっている私がいた。女子用のやりなのに。「結婚祝いにいいものをやるけんね。」というわけでスパイクをいただいたのだが、他にもプレゼントがあった。そのプレゼントというのが、「長崎県陸上選手権大会へのエントリー」だったのである。正直びっくりした。県選手権大会とは、国体の予選も兼ねていて、一般の人だけでなく、高校生も出場する。高校生にとっては、高校総体に次ぐ大きな大会である。そんな大会に私が出ていいはずがない。でも、2万数千円もするスパイクを買ってもらっておきながら、断ることはできなかった。

その年、やり投げにエントリーしていたのは、高校生48名、一般2名であった。一人が私で、もう一人は去年の優勝者の〇〇君であった。陸上競技の投擲種目は、記録の悪い順に投げる。だから、本来なら初心者の私は最初に投げるべきなのである。しかし、エントリーが遅かったために、なんと、なんと、最終投擲者になってしまっていたのだ。つまり、去年の優勝者の〇〇君の次に投げなければならないのである。当然、高校生たちは私に注目した。

「誰？あの人。知っとる？」「うんにゃ、知らん。でも、〇〇さんより後やけん、すごか人やろ。」などと言っている。「お前ら、見たら分かるやろ。」と思いつつも、かっこつけている私がいた。そうこうしているうちに、試合が始まった。

「続いての投擲者は〇〇君。去年の優勝者です。」アナウンスのおかげで、男子やり投げに注目が集まった。その熱い視線の中、〇〇君の投げたやりは、まるで生き物のように、お尻を震わせながら、大きな放物線を描いてフィールドに突き刺さった。「ウオー！」という大歓声が巻き起こった。さすがは去年の優勝者。50mを大きく超えていた。会場が大興奮に包まれる中、私はイヤな予感がしていた。そう、会場にいる全ての人の視線が私に注がれていたの

だ。

「さあ、男子やり投げ。いよいよ最後の投擲者は、渡崎君。」審判員の白旗が振られ、私は右足から助走を始めた。助走しながら自分に言い聞かせたことがある。「俺は物理の教員だ。斜方投射は大得意。」「オリャー！」という雄叫びとともに、私の手を離れたやりは、まるで生き物のように、ぐるぐる横に回りながら、20m先のフィールドに墜落した。静まり返った会場から、「あの人、かわいそうかね。」という声が聞こえた。私のやり投げデビュー戦はこうして終わった。（当時、次郎27歳）

初心者なので仕方ないと思いながらも、悔しい思いがこみ上げてきた。それから半年間。生徒より早くグラウンドに出て、一生懸命練習した。本やビデオで勉強し、顧問の先生にレポートを提出したりした。そして、11月、長崎県民体育祭で47m64cmを投げ、決勝に進出し、7位になることができた。さらに、平成21年の長崎県民体育祭（40歳代の部）では、とうとう優勝してしまった（ちょっぴり自慢、えっへん）。

諫早高校、附属中学校の生徒諸君。失敗を恐れるな。失敗しても、その悔しい気持ちが君たちを成長させる。君たちは無限の可能性を秘めている。志を立て、一生懸命努力しよう。私たちは君たちを全力で応援する。パワー！！

